

小平図書館友の会 会報45号

ネット公開版



発行日 2021年6月30日
発行者 小平図書館友の会会長 剣持 香世
藤方
ブログ <http://yamaoji.cocolog-nifty.com/kltomonokai/>
Eメール kltomonokai@gmail.com



もくじ

—特集— 中村桂子さん オンライン ZOOM 講演会 (2021/6/6)	1-3
学習会報告 YA を楽しむ会	4
次回講演会予告 2021/9/12 牧野伊三夫さん	4

2021/6/6 中村桂子さん 講演会 (オンライン ZOOM)

いのち 今、つたえたいこと ～コロナ・パンデミック 2年目の夏～

6月6日(日)午後1時半から、小平図書館友の会主催の Zoom 配信による講演会が行われました。



中村桂子さん

講師に、科学者で JT 生命誌研究館(大阪府高槻市)名誉館長でもいらっしゃる中村桂子さんをお招きし、お話をさせていただきました。

中村先生の講演会は、実は昨年の6月に企画していたのですが、コロナ禍により延期を余儀なくされ、講演会の形式を感染状況に関わらず遂行可能な Zoom 配信に変更して、再トライしました。当日、中村先生は世田谷区のご自宅から、一般の方およそ50名は各自宅から、私たちスタッフ7名は元気村のあすぴあ会議室から入室しました。中村先生のお話を全て網羅することはできませんが、概略をまとめてみました。

先生は、“コロナウイルスは目に見えないものだが、これと向き合わなければならぬ”と話し始められました。まず、いのちのことを考えるにあたって、東日本大震災と新型コロナウイルスを取り上げ、東日本大震災の時は「絆(きずな)」ということばがよ

く使われ、コロナ・パンデミックの中では、「利他」ということばが目についた。「絆」の本来の意味は「馬などの家畜を繋いでおくもの」であり、「無理に繋いでおく」感じがある。「利他」は、利己を抑えて他人のことも考えようという意味であり、コロナ禍でのマスク着用も他の人に感染させない「利他」を含む。いずれも重要だが、まず自分ありきだ。

“「生命誌」はそうではありません。まず「私たち」地球上のさまざまな生きものがあって、その中に「私」があるという考え方をしませんか？”と先生は問いかけました。「私」はまず「私たち家族」の中において、家族はまた「私たち日本人」の、日本人は「私たち人類」の、さらに人類は「私たち生きもの」の中にいるというわかりやすい絵図と、ご自身が考案した扇形の「生命誌絵巻」(団まりな/協力・橋本律子/画)*をパワーポイント資料で説明された。絵巻の扇のかなめに38億年前の共通の祖先がいて、扇を開いた部分に、人類だけでなく、現存する動植物や、あらゆる生きものが横に並んでいる。

「私たち生きもの」として考えることがいのちを考えるのに大切なことであるとし、次の4点を強調されました。

*JT 生命誌研究館 <https://www.brh.co.jp/> 参照

- ① 地球には数千万種もの生きものがいる。
- ② 38億年前の海に存在した共通の祖先の細胞・DNAをあらゆる生きものが引き継いでいる。
- ③ きのかも、イルカも、人間も、この地球上の生きものは、すべて38億年という歴史の時間を持ち、命の重みがある。
- ④ 人は他の生きものを下位のものとして見てしまいがちだが、他の生きものと同じ目線で考える視点に立って、時間と空間の大きな広がりの中で、いのちのことを考える。

「私」の体内には、目に見えないバクテリアが腸内だけで1兆個（ml）もいる。これがないと人は上手く暮らしていけない。特に腸内にバクテリアが多くいるからこそ食べ物を消化し、病気も防ぐ。最近、ウイルスも常時体内にすることが判った。その数は380兆個だそうだ。「私」はもうすでに「私たち」。人にとって悪さをするウイルスやバクテリアにはワクチンなどで対応し、全体としては「共存する」という社会のあり方を探っていかなければならない。

さて、生きものとしてのヒトの特徴を見よう。生命の歴史を辿ると人（ヒト）は、700万年前にチンパンジーとの共通祖先から分かれ、さらにその中からホモ・サピエンスが生まれた。小さな犬歯のため戦いには向かず、弱かったからこそみんなで助け合い、二足歩行で食べ物を求め、新しい場所へと、アフリカの森から地球のあちらこちらへ移り住むようになる。人は互いに共感し、家族で子育てし、分かち合う。最大の特徴は想像力で、そこから創造力が生まれた。そこで言葉と文字を持ち、読書を楽しむ存在になったのだ。

では、いのちを大切にするには具体的に何をしたらよいか、先生は2点だけ挙げました。

- ① 自然と接して、私たちが生きものであるということを実感する——

現代はどんどん自然離れが進むが、子どもを育てるには、コンピュータと英語だけでなく自然に関わらせることが大切。先生がきっかけを作った喜多方市小学校の取り組みには、農業科があり、時間割の中に農業がある。地域のお年寄りから農業を教わり、農作業を通して、子どもたちは自然と野菜に話しかけ、子どもが育てた野菜を家族が大切に食し、みんなが笑顔になる。また、自分で考え行動する能力を身につける。これらは子どもが生きていく上でこれからの行動に反映され、生きる力となる。社会全体

がそのようになることで、私たちが生きものであることと、繋がりの中に自分がいることを実感する。

- ② 本を読む——

様々な問題を乗り越えていくには創造力が必要で、その要素となる想像力を膨らませる子どもに育てることが肝要。本を読むとその内容が心に残り、その子の生き方に繋がる。本は自分に合ったものを自分で探すことができ、それを大事にしていく。

— 先生が紹介された本 —

- 『「ふつうのおんなの子」のちから 子どもの本から学んだこと』 中村桂子/著 集英社クリエイティブ
- 『あしながおじさん』 ジーン・ウェブスター/著
- 『二人のロッチェ』 『動物会議』
- エーリッヒ・ケストナー/著
- 『永遠平和のために』
- イマヌエル・カント/著 池内紀/訳 集英社
- 『ぼくがここに』 まど・みちお/詩 童話屋
- 堤中納言物語より「蟲愛づる姫君」 作者不詳

先生のお話を伺い、私たち生きものから社会のありようまで提唱する生命誌の学問の奥深さを感じました。いのちの重みや生きていくため何が大切かを優しい語り口で話され、コロナ禍で鬱々していた気持ちが清々しい充足感に満たされました。また子ども文庫に携わっている私にとって、先生が読書の本質、醍醐味、大切さを代弁してくださったようで大変嬉しかったです。先生が紹介された本には懐かしい本もあり、どの本にも普遍的なテーマがあって、多くの子どもたちに届けたい本です。参加者からの質問は、チャット方式を取り、先生の子ども時代と本との関わりについて、ワクチンは私たち生きものにとってどんな存在？ コロナウイルスに対する心構え、向き合い方は？ 虫好きのお子さんのお話などが出て、時間の許す限り先生は丁寧にお答えしてくださり、先生のお人柄も感じられる2時間となりました。（内田清子）

～講演会に参加して～

数年前、知人から『いのち愛づる姫』[※]を頂きました。長年、文庫やおはなしキャラバンの活動をしている彼女が、数多ある中から選んだ本なのだというので興味を持ちました。

堀文子さんの美しい絵とコミカルな会話でお話が展開していくのですが、そこで語られているのは遠大な命の物語で、作者中村桂子さんの生命誌への熱

い思いが伝わってくる本でした。

そこで、今回直接お話が伺えることを楽しみにしていました。

38億年の「命」の営みの中から、「私たち生き物」がいる。しかし中村さんが「私たち」とおっしゃる時、それは人間だけではない地球上に生息する多様な生物たちであり、それぞれが38億年の歴史の上に存在している。しかも人間の体内にもバクテリアやウイルスがいて、すでに「私」ではなく「私たち」であるという話には、生命とは何ぞやと頭がクラクラしました。

その中でも特に、「弱いもの」として出現した人間の話は興味深かったです。犬歯が小さく戦うには向かない人間は、二足歩行を獲得したことで脳が大きくなり、他の動物には無い「強く共感する力」「想像力」「創造力」を得たと言う。

この能力のお蔭で科学技術も進歩し、他の生き物から突出したように見える人間の世界ですが、生きるということの本質を見失っていないか、「あなたはどうか考えますか?」と問いかけられた気がしました。

※『いのち愛づる姫 ものみな一つの細胞から』
中村桂子・山崎陽子/著 堀文子/画 藤原書店 2007
(会員 高木享子)

講演会に参加するのは本当に久しぶり。それにZOOMという形態での講演に参加するのは初めての体験。少し緊張して始まりをまつ。

中村桂子さんは終戦時小学4年生だったそうだが、見た目も声もお若いので何となく頭の中でお年を計算してしまう。

さて、本題の「いのち」について、地球の誕生から38億年。「いのち」あるものはすべて38億年の時を超えて「いのち」をつなげている。丸い地球のありとあらゆる「いのち」が生きている。そして、その中のほんの一粒の小さな私。

38億年の地球の歴史の中で「今」は瞬きよりもわずかな一瞬、そこに私が生きている。この一瞬一瞬がとても貴重なのだと今さらながらに感慨深い。

私という「いのち」が今につながり、次につながっていく。私は小さくほんの一瞬だけれど途方もなく多くの、大きな「いのち」の輪に包まれて生きているのだと思うと、何となく安心する。心が安らぐ。そしてひとつひとつの今を、今生きていることを、今生きている私の周りの「いのち」を大切にしていきたい。

中村桂子さんは何冊もの本を紹介してくださった。特にケストナーの「動物会議」はもう一度読みたいと思う。有難うございました。

(会員 奥村公子)

今回はタイトルに制約されない、大変幅広い、又深いお話をしていただき感謝だけではなく、改めてたくさん勉強になりました。

詳細は抜きにして、最初に驚いたことは、喜多方の小学校の農業科・・・に関連しての活動でした。勿論あらゆる生物に関しての知識をお持ちですが、農業に関してはやはり経験が必要かとも思いますが・・・。

又何冊かの本の紹介もあり、皆さん参考になされたかと思えます。

そして単にご自分の専門分野だけでなく、人間関係、志向性に関しても平和と幸せを感じる、人間性を感じ、まだまだ年老いてはいない85歳の先輩を想い拝聴いたしました。

質問としては適当でなかったかもしれませんが下記のようなメモを送ったのですが、届かなかったようです。

1. ヒトも自然の一部という考えで、行動範囲、人工物も広い意味で自然現象と考えるのか?
2. ウイルスは生物としては認められていませんが、構成するDNA、RNAなど生命誌の扇の中に入る物質としてははいないのでしょうか?

以上が、質問の主旨でしたが、個人的な生命誌への思いのひとつとして、感想文として記載しました。

(会員 池田春寿)

～講演会アンケートより～

大変興味深い内容でした。他者へ寛容であることが難しくなってきた世の中ですが、「わたしたち」という考え方を忘れずにいきたいと思いました。

(60代女性)

ZOOM講演会について:会場に集まらなくてもお話が聞けることは逆に集中できてよかった。メモを取りやすかった。誰でもが参加できるようになるともっと良いと思います。

(60代女性)

学習会報告

YAを楽しむ会

ティーンエイジャー向けの本を楽しむ会です。

緊急事態宣言が発令され元気村が休館した時でも、初めてZoomにチャレンジし、休むことなく活動ができました。月に2冊の課題本を読み、感想を述べ合うことでコロナ禍でも日常を取り戻すことができた、と励みにしているメンバーも多いです。コツコツと活動を重ね15年、取り上げた本はざっと330冊。出会って良かったと思える本は誰かに薦めたくなるもの。そのような思いで、この度おすすめ本のリスト『大人(だれ)が読んで面白い YA(ヤングアダルト)の本(ブックス) その2』を発行しました。2012年5月に作成したその1と大きく変わったのは、表紙絵はもちろん、本文もカラー印刷を取り入れたことです。手分けして各出版社に連絡を取り、表紙絵の書影許可の承諾を得ました。変わらないのは、この本面白いよ、ぜひ読んでというメンバーそれぞれの思いです。完璧な仕上がりとはいえませんが、個性溢れた文章が味わえるリストになりました。各図書館に蔵書していただく予定です。友の会のブログにもアップロードしました。どうぞリストを参考に、一冊でも多くおすすめ本を手にとってくだされば幸いです。(杉本順子)

～2020年11月から2021年5月までのテキスト～

- 11月27日(金)『あなたはそっとやってくる』
ジャクリン・ウッドソン (あすなる書房)
『たまごを持つように』まはら 三桃 (講談社)
- 12月18日(金)『レーナ』
ジャクリン・ウッドソン (理論社)
『パンツ・プロジェクト』キャット・クラーク
(あすなる書房)
- 1月22日(金) Zoomで実施
『アーヤと魔女』ダイアナ・ウィン・ジョーンズ
(徳間書店)
『水のねこ』テレサ・トムリンソン (徳間書店)
- 2月26日(金) Zoomで実施
『もうひとつの家族』キャサリン・パターソン
(偕成社)
『おいで、アラスカ!』アンナ・ウォルツ
(フレーベル館)
- 3月26日(金)『鐘を鳴らす子供たち』
古内 一絵 (小峰書店)

『僕は上手にしゃべれない』椎野 直弥
(ポプラ社)

(なかまちテラス ティーンズ委員会大賞作)

- 4月30日(金)『ケンガイにっ!』

高森 美由紀 (フレーベル館)

『ぼくだけのぶちまけ日記』

スーザン・ニールセン (岩波書店)

- 5月28日(金)『ぼくの帰る場所』

S. E. デュラント (鈴木出版)

『イーブン』村上しいこ (小学館)

小平図書館友の会主催 講演会 予告 絵を描くことと その周辺

講師 牧野伊三夫さん (画家 小平市在住)

牧野伊三夫 (まきのいさお)

1964年北九州市生まれ。画家。美術同人誌『四月と十月』同人・発行管理人。92年に広告制作会社サン・アド退社後、画家として活動を開始、食や旅、銭湯など暮らしの楽しみを題材にした著述でも知られる。著書に『僕は、太陽をのむ』港の人、『かぼちゃを塩で煮る』幻冬舎、『アトリエ雑記』本の雑誌社、絵本『十円玉の話』あかね書房など。現在、雑誌『POPEYE』で「のみ歩きノート」連載中。

『十円玉の話』
あかね書房



牧野伊三夫さんは絵を描く仕事の周りにたくさんのお楽しみを持っています。旅すること、食べること、飲むこと、お風呂を探すこと、何より人に出会うこと…。コロナ禍さえ逆手にとってひとり時間を楽しむ牧野さんの好奇心満載の生活術を話していただきます。

■日時 2021年9月12日(日)

13:30～15:30

■会場 小平市中央図書館3階 視聴覚室
感染防止対策をとって開催します。新型コロナウイルス感染症の状況次第で中止する場合があります。申し込み方法など詳細は8月に「市報こだいら」、チラシ、友の会ブログ等でお知らせします。